学校における諸問題
—精神健全相談を通して—

岩切昌宏
大阪教育大学

1. はじめに

ある公立中学校での精神衛生相談を行なうようにになって5年以上になる。そこで相談される不登校、いじめ、非行など学校での問題は、実に様々な方向へ広がっていく要素を含んでいる。すなわち問題となった生徒、その親、担任教員から始まって、クラスや学校を越えて社会の問題にも発展する要素である。

ここでは具体的な2つの事例を示し、自らの経験を合わせて考察された問題について、筆者なりの解釈を示したい。

2. 事例1

中学3年 男子 不登校

2学期に入ってから担任教員と母親から相談されたケースである。

1学期の終わり頃より不登校気味になった。朝が起きにくく、登校しても遅刻が多かった。家ではドアを閉ったり、物をぶつけたり、親に暴言を吐くなどしていた。次第に生活パターンも家族の者とは異なるようになり、夕食も自分でコンビニエンス・ストアーに買い物に行くことも多かった。

母親は彼の得意なことは手先を使ってやることであり、TVゲームやマンガが好きだと述べた。彼は以前塾に通っていたが、ある友達と帰りによくスーパー・マーケットに行くようになったため、塾を辞めさせられ、家庭教師に勉強を教えてもらうっていた。しかし、家庭教師の講義は聞いていても、出された宿題はいつもやっていなかった。

担任教員から見た学校での様子は、先生達とは気軽に話しをするが、友達の中では1人でいることが多いという。成績は中の下程度であった。

家族は父方祖父母と両親、妹の6人暮らしである。家は代々引き継がれている由緒ある家系であり、彼は家の跡取りとして、祖父母より大変可愛がられていた。本人が欲しがる物は何でも買って与えたいらしい。

筆者は勉強する意欲が無くなってきていること、友達関係が希薄なことから学校に行きたくなくなってしまっていることを述べ、あまり登校のことや遅刻のことをうるさく言わないうちに、また学校に行く意味について家族で一度話し合ってみるように助言した。

その後、しばらくしてドアを越る、物をぶつけ、暴言を吐くなどの行動はほとんど見られなくなった。しかし、遅刻、不登校の状況は変わらなかった。また朝食はほとんど食べず、夕食は1人で食べたり、夜食に食べてきたお菓子を食べたりしていた。家での生活もTVゲームをすることがや、マンガを読んでいることが多かった。家庭教師に教えてもらっても、あまり勉強しているようではなかったが、彼は家庭教師を解雇することには抵抗した。

11月になってから、突然彼は母親に習字をやりたいと言い出した。母親は以前、習字を習っていたが、次第に行かなくなって辞めてしまっているのに、この受験間近になって、なぜそんなものを習う必要があるのかと反対した。しかし彼は自分で習字の先生に話をしてきて、週1回習うことを決め、そして習字には休まず行くようになった。

筆者は「彼なりに自立しようとしているのだから、方向がずれていてもやかくいわないように」と母親に助言した。

12月には、ある生徒とけんかをし、より学校に
行きにくくなったようであった。その12月に筆者は本人と面談する機会を持ったが、その時彼は「今は学校よりも家にいる方が良い。自分の得意なことはないが、将来はコンピュータとか工学系のことをやめてみたい」と言っていた。

1月に入ると、受験が間近なのでまだゲームに熱中しているのを、母親が心配になって相談に来た。

受験予定は日程順に私立A高校、Bコンピュータ専門学校、公立C高校の3校であった。私立A高校は家庭教師が公立だけで大丈夫かと言われたため、受けることにしたという。公立C高校は以前から彼が志望していた高校であった。

担任教師達の評価では、私立A高校とBコンピュータ専門学校は充分合格できるが、公立C高校はかなり難しいということであった。

筆者は親に対し、受験の心配をすることが彼にむしろプレッシャーとなって、勉強をやりにくくしていることを指摘し、心配をあまり表明しないことを助言した。またそれを受け、担任教師は「いままでやったところをぎっと目を通す程度の勉強の方法で良い」と母親に述べ、それを彼に伝え、安心させようとした。

それにかかわらず、やはり私立A高校の受験前日に彼は随分緊張したようで、遅刻しないために学生服を着たままで寝たらしい。そして結局彼は、ほとんど眠れないまま受験場へ向かった。それでも面接ははずまずできたようであった。数日後、合格通知が家に届いたとき、彼を含め、家族のみんなは大変喜んだという。

その後、彼はBコンピュータ専門学校の受験を取りやめ、公立高校のみを受けることにした。ところが彼は公立C高校ではなく、合格可能性が高い公立D高校に志望を変更し、そして見事に公立D高校に合格したのであった。

母親は合格の御礼に来校したが、なおも高校で再び不登校になるにではないか心配であることを話した。筆者は「その可能性は充分あるが、登校に関してはお目を向けずに、彼が少しずつ自分で考え、行動するようになっているところを注目し、たとえ不登校になっても見守る姿勢を大切にしてほしい」と述べ、この事例の相談を終了としました。

彼が不登校となっていった理由にはまず、成績が思うように伸びず、以前から希望していた高校への進学がかなり努力しないと難しいことがわかってきたことが大きいと考えられる。なぜなら3年の2学期頃に不登校になるというのは受験が関係している可能性が高いからである。親は不登校気味になってから「高校はどこへ入ってもかまわない」と言っていたが、本人はなかなかその志望を変えることが出来なかった。その点でもこだわりが強くあったといえる。勉強していなければいけないが、やりたくないという彼の揺れ動く気持ちが家庭教師を辞めるかどうかのこともよく表れている。

学校へ行かなくてはならぬ、授業を聞かなくてもならぬ、家でも勉強しなくてはならぬとは思っていても行動が伴わず、TVゲームやマンガに逃げ込んでいたと考えられる。これは以前より公立C高校に入らないべからざるものと、家庭から言われていたのか、自分で決めていたのかはわからないが、自分の中で諦めることに至っていたのだろう。しかしそうそうしなければいけないのか、そのための努力が自分にとってはどれほど大変であるという洞察はできていたかのような。彼はもともと成績は悪い方でなかったが、甘やかされた環境を手伝って、苦手なことも努力してしまうタイプではなかった。勉強が努力しないと伸びなくなってきて、公立C高校には入りたいけど、勉強はしたくないという板挟み状態になったのである。

普通この年齢では、これらの悩みを親との相談よりも友人達との中で解消して行く。彼は友人には大勢いと言ったが、教師の見るところからして、彼の友人というのは表面的な付き合いしかなかった可能性が高い。先生達と話ができて、生徒達とうまく話が出来ないと言うのは、対等の立場での関係を持つことができていないことを示している。親には本当の気持ちが言えないくらい彼は、受験の悩みを消化できずにいたのだろう。

塾での友人は、彼の対人関係を深めることがで
この事例は、不登校の中では割合よくみられるタイプに入る。昔の神経症性登校拒否（現在でも狭義の不登校として使われる）と言われた事例の様に生真面しくて優等生、強迫的であり、対人関係に過敏、学校に行けない自分を真剣に悩むと言ったタイプとはかなり違う。今はそういうタイプもいるが少ない。不登校の様々なタイプが増えたせいで相対的に少なくなったかもしれない。不登校が多くなって、社会的にも承認されてきている中では、不登校をすることの悩みは軽減され、その代わり、（狭義の）不登校とも怠学ともいえないタイプが増えている。だいたい不登校という言葉自体、原因で分けられないためでできた言葉であるので、今後もその示す内容は変化して行くだろう。

分類からすればこの事例はやや怠学的な要素も持つが、不登校の範疇に入ると考えられ、詳しく言えば自我熟成の不登校（小泉英二いうBタイプ）に当てはまるだろう。しかしこの分類は別としても、このケースの問題としては、志望校への進学が難しいと感じたことがきっかけとなって将来に対しても目標が定まらず、現実逃避的になっていったことと、そのような悩みを解消もしくは軽減させてくれる友人が持てないこととである。広く考えてみると、受験を含め将来のことを問題と友人関係の問題とすると普通の中学生でもしばしば抱える問題である。もちろん彼の背景には大家族であり、祖父母が過保護であったこと、母親も心配性で過干渉であったことが多分に関与していると考えられるが、過保護などの過干渉の問題は現在でもしばしば普通の中学生の家庭で見られることがある。

さてここで問題にしたいのは、まずは親が受験を含め子供の将来をどのように考えているかということである。ここには未だに学歴偏重の考えが根強く残っている。学歴が重要ではないことは言いたくないが、もちろん学歴が全てを語るものでも、将来を決めるものでもない。親が本人をより無難な方向に進ませたいために多くの人があが良いと思っている枠にはめようとすることに力注ぎ、本人
をよく見ていなかったということがしばしば起こっている。親の過干渉の問題の多くはそこである。しかも最近、勉強のことはややまさしく、従来的な面に関しては甘い傾向といえることがしばしば見られるようになった。

もう一つは友人関係の問題である。友人関係がうまく築ける生徒でも大抵は何らかの生徒との関係があり、その関係は利害関係であったり、親分子分やいじめ子いじめられっ子のような支配・被支配関係であったりする。しかしそのような関係からでしか友人（？）関係をもってない生徒も多いのである。ほとんどどの生徒の一番辛いことは全ての生徒から無視されること、相手にされないことである。親から見ると良い関係に思えなくても、そこから何らかの適応手段を見つけていっているのである。この事例では親が友人関係を断ちてしまうっている。彼ら同志の関係にある意味において、大人達が入っていけない関係であり、また入ってはいけないところでもある。どんな大人達が入ることに依存し、入りハイナミックな深い人間関係は築けない。だからといって彼らをかかなげに放ったらかしておくのとは違う。要は大人達（先生や親）が大人の視点と彼らの視点の違いを認識して対等に話し、そのことにお互い責任を持つ関係を作ることが重要なのであろう。大人達が彼らを弱体として優遇するのではないか、しっかりととした視点で彼らの関係を見守っていく（決して監視ではない）ことだと思う。そういった意味でも大人の介入は出来るだけ避けて、彼らが諸策を講じてもらういくか、相談されたときにだけ介入するようにしたいものである。中学生は自我を強く意識する時期でもあり、そういう言葉で望むことが特に必要であると考えるのであるが、現状の生徒や親たちは学校に依存し、学校は大人達の規範を通そうとする傾向がある。現状でいきなりそのようなことを前面に打ち出しても、大混乱が起こるだけかもしれない。

3. 事例

中学1年生 女子 トラブルメーカー

担任教師から相談されたケースである。

彼女はクラスのみんなから嫌われていて、それ
で彼女自身も悩んでいるということであった。そ
のことが学級会で取り上げられたが、「友達の会
話に入り込んでる。」「他のクラスの生徒が友人
を訪ねてきた時、その当人がいるにもかかわらず、
彼女はいないと言う」などの問題点が挙がった。

担任教師も嫌われるのは本人の問題が大きいよ
うに感じるが、指導の仕方に助言が欲しいとい
うことであった。

その他、担任教師から見て目立つ行動としては、
異性に対しての興味が強く、相手に積極的にアプ
ローチしていくため、相手も困ってしまうという
ことであった。それも相手を次々と変えられる、
ところで彼女は立候補による学級委員長でもあり、
本人としてはがんばっているつもりであるが、空
回りしているらしい。成績は下の方という。

家族は両親と弟（小3）、妹（2歳）との5人
暮らしである。

父親は厳しく、幼少期に彼女はよく叩かれたら
しい。

妹のことを手伝わなければいけないため、母親
から午後4時半までに帰ることを命じられていた。

家庭訪問の時、担任教師は親に彼女の学校での
問題を述べ、彼女の話を聞いてもらうように伝え
たが、母親は「本人と話しても信用できない。以
前、家のお金を盗んだことがあったから」と述べ
た。

この事例は一見、軽減状態とも思えるが、じっ
と座っておられない、注意や集中力がない、話題が
次々に飛ぶなどの状況は見られていないので、そ
の様な病的な状態ではないようである。本人が悩
んでいるというが、むしろクラスの生徒達が彼女
にどう対応してよいのかからず、困っているよ
うであった。

彼女はいわゆる目立たがるの範疇に入り、み
んなにかまってもらいたい、注目してほしいとい
う気持ちが強いのである。その気持ちが彼女を学
級委員長にさせたともいえる。言い換えれば、
「もっと愛情が欲しい」という言葉で彼女の行動
学校における諸問題

は集約できるであろう。ただ彼女はその気持ちから短絡的とも思える行動にでてしまうのは、彼女の性格なのか、よほどの感情に飢えているかどちらか、もしくは両方の要因が推察される。

愛情のことを考えて、親の態度が気になるところである。担任教師から見ても、母親は本人に対し拒否的なようである。お金も שבהだときも彼女の中にどのような気持ちがあったのかよく考えていたのだろうか。この様々な行為をするとき、愛情に飢えているときであることも多い。父親にせよ厳しくいうが、どういうところが厳しかったか、よく内容を吟味しなければならない。最近、親が厳しいというのは大切な教義的内容を持つ厳しさだけでなく、親の都合による、親のわがままともなされる厳しさであることを少なくはある。親が自身に自分自身に厳しいかどうかを見れば、それはわかる。どう両親とも本人のことをほとんど考えていないという印象が強い。実際、親は相談には来なかった。筆者は彼女には本来の意味での親が必要なのだと思感じた。

現在彼女に対しては、担任教師が密接な関係を持ち、親のような役割を努めることもある。

この事例は一般的なものではない。しかし、親が不在である、すなわち親が親としての機能をほとんど行なっていないと考えられるケースは確実に増えている。これは日本で親の子に対する虐待の問題が増えてきていることからも推察できることである。

さて、担任教師はクラスにその様子が一人だけなら何とか対応できるかもしれませんが、そういう子が次第に増えてきている現在、今後教師達はどうにか、どこまで対応していったら良いのだろうか。これは学校教育の大きな問題である。事例1の考察で述べたように生徒達の力動を中心に考えると、生徒同志の中で成長ができることが望ましいが、今のところそういう基盤はほとんどできていないと考え良い。そして生徒や親達は学校に依存し、先生達は侵入的な要素も含む介入をすることになる。

現実的な対策として、現場の教員達からは教師を増やし、クラスの規模を小さくすることが提案されているが、少子化とともに教員を削減しているこうとする文部省の方向とはずれる。この様な政策の中ではスクールカウンセラーが入ったとしても、スーパーマンではあるまいし、そのことは微力でしかないだろう。筆者にはスクールカウンセラーや心のたれあいフレンドなどは全体としてみれば、体裁を取り繕っている程度にしか見えない。

結局はもっと根本的なところを考えないといけないではないだろうか。それは学校教育であることは言うまでもないが、したことが明確にするである。今後のことを不明瞭にしているから、学校教育がオールマイティーのような方向性、すなわちもと色々な対策で充実させるという方向性と学校をもっとスリムにしようと方向という相反する方向性の2つを示すおかしな事態になるのではないか。学校教育自身の質が低下しているのであることと、少なくとも筆者が受けていた20数年前の教育より、ずっと生徒思いのものになっていると筆者は思うのであるが、違うのであろうか。時代が変わり、生徒達、親達（大人達）の個別化が進んできた社会で、学校教育の目的が形骸化してしまったわけではないのだろうか。ようく財政をかけて学校教育を充実させていくのでないならば、学校教育はこの程度しかできないとその限界を示した方がもっと身近な問題としてみんなが考えるのではないだろうか。

4．おわりに

親の問題としては、事例1を通じて未だに多い過保護、過干渉の問題を挙げ、事例2を通して最近増えてきている放任の問題を挙げた。どちらも子供との距離の取り方の問題とも言えるが、結局は本人をさしきいて、親の心配や、都合が優先されていることに由来する。子供とは本当の意味で向き合っていないのである。すなわちこれは親自身が自分の問題に向き合っていないからである。親自身が現状を良好とせず、だからといって将来に展望を見いだせず、打算的合理主義に陥っているならば、子供にそれは投げされる。
学校の問題としては、事例2を通して学校教育がどこまで個別に対応していくのか、生徒達の努力はどうなるのかというテーマを述べた。
これらは家庭教育や、学校教育の問題であるが、それは大人達が教育というものをどう考えているのか問われており、強いては大人達自身の生き方、すなわち人生観、幸福とは何なのかということが問われているのである。

＜文献・参考図書＞

湯川一寛編「こころの科学78：中学生は、いま」日本評論社，1998
河合準雄編「こころの科学70：いじめ」日本評論社，1996
大塚義孝編「こころの科学増刊：スクールカウンセラーの実際」日本評論社，1996
富田和巳「子どもたちの警告：不登校・いじめは日本の文化」法政出版，1996
馬場謙一編「現代のエスピリ330：学校臨床」至文堂，1995
稲村 博「不登校の研究」，新曜社，1994
吉田徹二「不登校」，高文研，1993
山崎晃資編「こころの科学51：不登校」日本評論社，1993
河合隼雄 「文化の病」としての不登校，精神療法，19（6）：505－509，1993
町沢静夫 不登校の類型，精神療法，19（6）：510－517，1993